

## 「思想」とは

——ブレイク『蠅』を読む

松島正一

### (1)

ブレイクの『蠅』は、一読したところ易しい詩に見えるが、いろいろと考え始めると難しい作品である。まずテキストを読んでみよう。

Little Fly

Thy summers play,  
My thoughtless hand  
Has brush'd away.

Am not I  
A fly like thee?  
Or art not thou  
A man like me?

For I dance  
And drink & sing:  
Till some blind hand  
Shall brush my wing.

If thought is life  
And strength & breath:  
And the want  
Of thought is death;

Then am I  
A happy fly,  
If I live,  
Or if I die.

小さな蠅よ

おまえの夏の遊びを  
私の思想のない手が  
叩きつぶした。

私もおまえのような  
蠅ではないのか？

それともおまえは  
私のような人間ではないのか？

なぜなら私は踊って  
飲んでそして歌う、  
ある盲目の手が  
私の翅を叩きおとすまで。

思想が生命であり  
力で呼吸であるならば、  
思想の欠如が  
死であるならば、

その時、私は

幸福な蠅である、

私が生きていようと、

死んでいようと。

第一連で、「私」は「小さな蠅」に対して、私の「思想のない」手が「おまえの夏の遊び」を「叩きつぶした」と述べる。第二連では、私は「おまえのような蠅」、おまえは「私のような人間」という直喩で、私と蠅とが同じような存在ではないのか、と問う。第三連では、「ある盲目の手」が「私の翅」を叩きおとすまで、つまり死ぬ時が来るまで、私は「踊り、飲み、歌う」という「思想のない」生活を送り続ける存在である。第四連で、思想 $\parallel$ 生命 $\parallel$ 力・呼吸、という公式を仮定し、さらに、思想の欠如 $\parallel$ 死、という公式を仮定する。最終連で、第四連の仮定が成立するならば、私は生死に関係なく「幸福な蠅」である、という結論に到達する。ところで、これまで「Fly」を「蠅」と訳してきたが、「Fly」は「蠅」とは限らないのである。サミュエル・ジョンソンの『辞書』によれば、十八世紀にあつては、「Fly」とは「いろいろな種類の翅のある小さな昆虫」(“a small winged insect of many species”)と記されている。この小さな昆虫には「蝙蝠」(bat)は入らないが、「家蠅」(housefly)、「蝶」(butterfly)、「蛾」(moth)、「蜻蛉」(dragonfly)などが含まれる。「Fly」が何を指すにせよ、「Fly」は「はかなさ」(ephemerality)、「弱々しさ」(feebleness)、「取るに足らぬもの」(insignificance)のシンボルである。



William Blake, *The Fly*

(From *Songs of Innocence and of Experience*,  
Liverpool, Henry Young & Sons, 1923)

ブレイクのテキストは、詩と挿絵が一体となったものであるが、『蠅』の挿絵は一見すると、この詩とうまく合っていないようにみえる。中央では、男の子が母親に「あんよ」を教えられている。その背後では、女の子が一人で羽根で遊んでいる。男の子はかなり大きな子で、すでに歩けるはずだが、子供の上に抑圧的に覆い被さった母親に教育されている。弧のように曲がった枝が、子供と母親の上に覆い被さっている。女の子は性的に成熟しているようにみえるが、子供のゲームをやらされている。羽根突きは二人するのが普通であるのに、彼女は一人でやらなければならない。二人の子供は、経験界における「教育」が持つ抑圧的性質を暴露しているといえる。このような中で育てられた子供たちは、死ぬまで「踊り、飲み、歌う」以外のことは何も出来ないのである。

ブレイクは『ノートブック』を残しているが、それを見ると『蠅』の制作過程がよくわかる。

- a      Woe alas my guilty hand  
          Brushed across thy summer joy  
          All thy gilded painted pride  
          Shattered fled
- b    1   Little fly  
          Thy summer play  
          My guilty hand thoughtless hand  
          Hath brushed away

- c    ~~The cut worm~~  
     ~~Forgive the plow~~  
     ~~And dies in peace~~  
     ~~And so do thou~~
- d 2   Am not I  
     A fly like thee  
     Or art not thou  
     A man like me
- e 3   For I dance  
     And drink & sing  
     Till some blind hand  
     Shall brush my wing
- 1 5   Then am I  
     A happy fly  
     If I live  
     Or if I die

g 4 Thought is life

And strength & breath

But the want of

Of thought is death

h 4 If thought is death

And strength & breath

And the want of

Of Thought is death

『ノートブック』と現行のテキストを比べてみると、まず最初に、第一連と第四連にかなり大きな変更があることに気づく。最初に考えられた第一連「哀しいかな、ああ、私の罪深い手が／おまえの夏の喜びを横ざまに払った／金色に塗った色鮮やかなおまえの盛りがすべて／碎けて散った」には、トマス・グレイの影響が色濃くあるように思える。また、本来は第二連であった四行「切られた虫は／鋤を許し、／安らかに死ぬ、／そしておまえも同じだ」が削除されてしまった。この前半の二行は『天国と地獄の結婚』の中の「地獄の格言」(“Proverbs of Hell”)に使われている。もともと、この二行はロバート・バーンズの『ネズミに』(“To a Mouse, on turning her up in her Nest with the Plow”)から借りたものであろう。



変更の中でも特に重要と思われるのは、現行のテキストの第四連が、第五連の後に記されていることである。この事実からみて、この四行が後からの思いつきで書き加えられたものであることがわかる。現行のテキストで解釈を難解にしているのが第四連であり、第四連と第五連の論理的なつながりがすっきりしない原因は、ここにあるのかもしれない。第四連では、決定稿で“*It*”という接続詞が加わり、接続詞が“*But*”から“*And*”へ変更され、意味に微妙な変化を与えている。

ブレイクがトマス・グレイの作品を熱心に読んでいたことは、よく知られている。一七九七年、ブレイクはジョン・フラクスマンにグレイ『詩集』の「挿絵版」の制作を委託された。その際に用いられた『グレイ詩集』は一七九〇年版であった。ブレイクはこのテキストのために百十六枚のデザインを付けて、一八〇五年九月頃にフラクスマンの妻ナンシーに渡している。

『グレイ詩集』の巻頭を飾る「春の歌」(“*Ode on the Spring*”)が、ブレイクの『蠅』に大きな影響を与えているのは明らかである。グレイのオードは全五連から成る作品であるが、とりわけ次に引用する後半の三連が『蠅』と関係がある。

Still is the toiling hand of Care :  
The panting herds repose :  
Yet hark, how thro' the peopled air  
The busy murmur glows !

The insect youth are on the wing,  
Eager to taste the honied spring,  
And float amid the liquid noon :  
Some lightly o'er the current skim,  
Some shew their gayly-gilded trim  
Quick-glancing to the sun.

To Contemplation's sober eye  
Such is the race of Man :  
And they that creep, and they that fly,  
Shall end where they began.  
Alike the Busy and the Gay  
But flutter thro' life's little day,  
In fortune's varying colours drest :  
Brush'd by the hand of rough Mischance,  
Or chill'd by age, their airy dance  
They leave, in dust to rest.

Methinks I hear in accents low  
The sportive kind reply :

Poor moralist! and what art thou?  
A solitary fly!  
Thy Joys no glittering female meets.  
No hive hast thou of hoarded sweets,  
No painted plumage to display:  
On hasty wings thy youth is flown;  
Thy sun is set, thy spring is gone—  
We frolick, while 'tis May.

働く人々の労苦の手は閑だ。  
息をあえぐ牛馬も休んでいる。  
だが、きけ、空気は生き物に満ち  
忙しいつぶやきに燃えている。  
幼ない昆虫たちは飛び廻って  
蜜のしたたる春に狂い  
真昼の日光の中に浮び漂う。  
あるものは、軽やかに水の流れをかすめ  
あるものは、派手に着飾った羽毛を  
さらきりと太陽にかがやかせる。

「瞑想」のつましい眼には

人間というやからは、そんなものだ。

地に匍うものも、空を飛ぶものも

その始まるところに終るのだ。

忙しいものも、派手なものも

生のわずかな一日を、はためき廻るだけのことだ。

運命が色さまざまな衣を着せる。

荒っぽい不幸の手に払い落されたり、

歳月に冷やされたりして、大空の舞踏を

彼らはやめる、そして土に帰る。

わが耳に聞こえる気がするのは、声をひそめて  
遊びまわる奴等の答える言葉。

あわれにも道を説く男、何だ君は。

ひとりぼっちの蠅じゃないか。

かがやく女性に会う喜びもなく、

蜜を貯えた巣を持つてはいず、

彩った羽毛の誇りも知らず、

ばたばたするうち、君の若さは飛んでしまう。

君の太陽は沈み、君の春は去る——

われわれは遊んで楽しむんだ、五月だもの。

（福原麟太郎訳）

最終行「われわれは遊んで楽しむんだ、五月だもの」に見られるように、グレイの思想はかなり「カルペ・ダ イエム」（“carpe diem”）的である。個々の単語の借用はともかくとして、ブレイクは、第四連の「人間という やからは、そんなものだ。／地に匍うものも、空を飛ぶものも／その始まるところに終わるのだ。」、第五連の 「あわれにも道を説く男、何だ君は。／ひとりぼっちの蠅じゃないか。」からモチーフを借りて、グレイの「昆虫」を自分流に変えていることがわかる。

ブレイクの『蠅』については、シェイクスピア『リア王』の次の二行の影響が指摘されている。

As flies to wanton boys, are we to the gods;

They kill us for their sport. (*King Lear*, IV, i, 36-37)

神々の手にある人間は腕白どもの手にある虫だ、

気まぐれゆえに殺されるのだ。（小田島雄志訳）

この二行の思想を、ブレイクは『無垢の前兆』（“Auguries of Innocence”）でもアフォリズムとして次のように利用している。

The wanton boy that kills the Fly  
Shall feel the Spider's enmity.

蠅を殺す腕白な少年は  
きつと蜘蛛の悪意を感じる。

ブレイクの時代に流行した「蠅」の話として有名なのは、『トリストラム・シャンディ』第二巻十二章にある叔父トウビーのエピソードである。

叔父トウビーは侮辱されても腹を立てない男でした。——叔父トウビーは蠅に恨みを晴らそうという気持さえほとほと持たなかったのです。

——行け——ある日の食事の時、叔父は食事の間中鼻まわりをブンブン飛びまわって散々に自分を悩ました、やけに大きな一匹の蠅——いろいろ苦勞したあげくにそばを飛び過ぎるところをやっとつかまえたその蠅にむかつて言つたものです。——おれはおまえを傷つけはしないぞ、叔父トウビーは椅子から立上つて、蠅を手にして窓のほうに歩みながら言いました——おまえの頭の毛——すじだって傷つけはしないぞ——行け、と窓を上へのほうに押しあげて、手を開いてにがしてやりながら——可哀そうな奴だ、さつさと飛んで行くがよい、おれがおまえを傷つける必要がどこにあるう、——この世の中にはおまえとおれを両方とも入れるだけの広さはたしかにあるはずだ。

（朱牟田夏雄訳）

また、ウィリアム・クーパーの『課題』には、次のような「蠅」の描写がある。

The million fit as gay  
As if created only like the fly,  
That spreads his motley wings in the eye of noon,  
To sport their season, and be seen no more.      (*The Task*, iii, 133-36)

昼日中班の羽を広げる

銀蠅さながらに、華やかに飛び回り、  
盛りの時期を遊びあかして、そのまま世を去る  
人々の何と多いこと。      (林瑛二訳)

さらに、ブレイクがアブラハム・カウリーの『きりぎりす』(“The Grasshopper”)を読んでいたのは明らかである。次の二行には「飲んで、踊って、歌う」がある。

Thou dost drink, and dance, and sing;  
Happier than the happiest king!      (ll. 9-10)

「蠅」を歌う作品は古来多数あり、ブレイク以前にはジョージ・バーネビ (George Barnabe, 1540-94) の

『蠅』（“The Fly”）’ ロベール・クリシアン（Robert Herrick, 1591-1674）の『蠅のふいふ』（“Upon a Flie”）’  
『琥珀色の数珠』（“The Amber Bead”）’ ウィリアム・オールデイス（William Oldys, 1687-1761）の『蠅』（“On  
a Fly drinking out of his Cup”）などがある。ここでは、オールデイスの『蠅』を紹介しよう。

Busy, curious, thirsty fly!

Drink with me and drink as I:

Freely welcome to my cup,

Couldst thou sip and sit it up:

Make the most of life you may,

Life is short and wears away.

Both like are mine and thine

Hastening quick to their decline:

Thine's a summer, mine's no more,

Though repeated to threescore.

Threescore summers, when they're gone,

Will appear as shorts as one!

忙しべ、奇妙べ、喉をからしむる蠅よ。



私といっしょに、私のようにお飲み。

自由に私のコップに来て、

いくらでも吸っていいのだ。

出来るだけ人生を楽しみなさい。

人生は短くまたたくうちに過ぎて行く。

私の人生もおまえの人生も共に

すぐに老いていく。

おまえの命は一夏、私のはもうない、

これまで六十回繰り返してきたが。

六十回の夏も、過ぎ去ってしまえば、

一年と同じくらい短かく見えるだろう。

ブレイク以降で「蠅」を歌った作品として思い出されるのは、ウォルター・デ・ラ・メアの『蠅』（"The Fly"）ロバート・フロストの『デザイン』（"The Design"）、カール・シャピロの『蠅』（"The Fly"）、ディラン・トマス『今日、この昆虫と、世界を僕は呼吸する』（"Today, this insect, and the world I breathe"）などである。

さて、ブレイクが他の作品で「蠅」をどう扱っているか見るために、『ミルトン』の次の箇所をあげておこう。

Now Albion's sleeping Humanity began to turn upon his Couch,  
Feeling the electric flame of Milton's awful precipitate descent.  
Seest thou little winged fly, smaller than a grain of sand?  
It has a heart like thee, a brain open to heaven & hell  
Withinside wondrous & expansive: its gates are not clos'd:  
I hope thine are not: hence it closes itself in rich array:  
Hence thou art cloth'd with human beauty, O thou mortal man.  
Seek not thy heavenly father then beyond the skies.  
There Chaos dwells & ancient Night & Og & Anak old.  
For every human heart has gates of brass & bars of adamant  
Which few dare unbar, because dread Og & Anak guard the gates  
Terrific: and each mortal brain is wall'd and moated round  
Within, and Og & Anak watch here: here is the Seat  
Of Satan in its Webs: for in brain and heart and loins  
Gates open behind Satan's Seat to the City of Golgonooza,  
Which is the spiritual fourfold London in the loins of Albion.

(*Milton*, 20: 25-40)

今やアルビオンの眠れる人間性がその寢床の上で寝返りを打ち始めた、  
ミルトンの恐るべき真つ逆様の降下の電撃的炎に触れて。  
汝は小さな翼のある蠅を見るか、一粒の砂よりも小さいのを。

蠅は汝のような心臓を、天国と地獄に開いている脳髓を持つている、内部の側は不思で広々としている。その門は閉じられてはいない。

私は汝のも同様なことを望む。この故にそれは豊かな衣装に身を包んでいる。

この故に汝は人間の美で包まれている、なお、汝、死すべき人よ。

汝の天の父をそれならば空の彼方に求めるな。

そこには混沌と年経た夜とオグと老いたアナクが住んでいる。

なぜならあらゆる人間の心臓は真鍮の門と金鋼石の門を持つているからである。

それをあえて外す人は殆どいない、なぜなら恐ろしいオグとアナクがその

ぞつとする門を守っているからだ。そして各々の死すべき脳髓は内部では壁で囲まれ、

また、ぐるりに掘をめぐらされている。そしてオグとアナクがここを見張っている。

ここに網状のサタンの席がある。というのは脳髓と心臓と腰のところ

で、門がサタンの席の背後に開き、ゴルゴヌーザの町へ通じているのである、

そしてその町はアルピオンの腰部の霊的な四重のロンドンである。

(2)

ところで、『蠅』の詩の語り手は誰なのだろうか。この問題に関しては、様々な意見がある。まず、語り手を『蠅』が収められている詩集『経験の歌』の「序の歌」に登場する「予言者ブレイク」と考えるデイモンのような批評家がいる。「詩人の声を聞け」(“Hear the voice of the Bard!”)と宣言するあのブレイクである。こ

れに對して、語り手を「詩人」とする批評家がいる。その理由として、この詩にはミルトンの『リシダス』の「下手な詩人」についてのエコーがあるからだという。さらに、一七九二年頃の詩を書いている「人間ブレイク」を語り手と捉えるベイトソンのような批評家もいる。これらの意見に對して、グラントは語り手をブレイクと捉えるのは間違いで、経験界にいる一人の男と考えるべきで、この男の声は墮落した世界の觀察者である「詩人」の声とは明白に区別されねばならない、と主張する。

『蠅』の語り手の見解とブレイク自身の見解とは一致するのだろうか。どうも一致しないように思える。この詩の結論は、死がいつ訪れても、死を哲学的に受け入れようと述べている。ブレイクは神のイメージを「慈悲、哀れみ、平和、愛」といった「神性な人間形」とみているが、「盲目の手」は「偶然で不注意な神性」を示している。この詩における「蠅」の存在は、ある盲目的な手に触れられて我々人間もいつかは死ぬ、ということを感じさせる以外に存在理由がない。しかし、ブレイクの見解は「生けるものすべて聖なり」であり、すべての蠅は「汝のような心臓を、天国と地獄に開いていて内部の側は不思議で広々としている脳髓」（ミルトン）二〇・二八（二九）を持っている。このような点から見ると、語り手の見解はブレイクのものではないと言える。

第一連で強調されているのは、蠅の夏の遊びなのか、それとも蠅の脆弱さなのか。第二連の「私と蠅が同じ存在である」という認識は、語り手にとって好ましいものなのか、それとも不快なことなのか。第三連の「踊って、飲んで、歌う」生活態度は、暢気なものなのか、それともどんな風に生きても死は免れない、ということと言っているのか。第一連から第三連まで、テキストはこれらの問いに對して何の鍵を与えてくれず、読者

は宙ぶらりんの状態に置かれたままである。人間の生死は、確かなる秩序の一部なのか、それとも無目的で理解できないものなのか。一体どちらに決めたいのか。結論はどちらとも言えることになる。

第四連の「思想が生命、力、呼吸である」という考えは、樂觀主義的であるが、そもそもこの詩は殺害という「思想のない」行為が始まっていた。そうすると、第五連で、私はなぜ「幸福な」のか。人間と蠅が同じであることは、アイロニーなのか。「思想が生命、力、呼吸である」→「思想の欠如が死である」→「私は幸福な蠅である」という三段論法は論理的であろうか。

蠅を殺害する行為を考えてみよう。挿絵では女の子が羽根突きをしているが、羽根を叩く、あるいは蠅を打つ行為は「禁じられた愛」の代用行為であるとよく言われる。また、ブレイクが『無垢の前兆』で「蛾も蠅も殺すな／なぜなら最後の審判が近づいているから」(“Kill not the moth nor butterfly, / For the Last Judgment draweth nigh.”)と述べているように、「小さく無意味で弱いもの」を扱うことと、最後の審判とは関係がある。これは、キリストが最後の審判の日に羊と山羊を分け「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(『マタイによる福音書』二五・四〇)と述べていることに由来する。

結局、この詩で問題となるのは「思想」という言葉である。ブレイクにとって「思想」とは何か。「思想」が十八世紀的な「理性」でないのは確かである。ブレイクは理神論、十八世紀の機械的で物質主義的な哲学を廃し、人間の心的かつ霊的な力、つまりヴィジョンを重視した。『蠅』の詩において、破壊された夏の遊び、踊り、歌、飲食を取り戻すことが出来るのは「思想」である。過った手で為された悪戯、盲目的な手によって

為された罪、これらを元に戻すことが出来るのも「思想」である。「思想のない」少年をヴィジョンを見る人間に変えるのも「思想」である。

『蠅』は「経験の歌」に収められている詩であるが、なぜ「経験」の世界なのか。ブレイクは「無垢」と「経験」を「人間の魂の相反する二つの状態」と定義している。彼は子供を「無垢」の象徴と捉え、子供が自然の中で動物、植物たちと調和し、神の愛のもとでその存在を祝福されているのが、ブレイクの考える「無垢」の世界である。『蠅』の調子と文体は「無垢」の世界に限りなく近く見える。また、挿絵に描かれている二人の子供、それに母親の世界は一見すると「無垢」の世界に思える。つまり、第四連が存在しなければ、この作品は「無垢」の世界である。

しかし、『蠅』には「無垢」の世界で祝福されるような調和がないように思える。「蠅」と「私」は同じ存在だと言いながら、両者の間には完全な調和が見いだせない。語り手は、「無意味な蠅」と自己との関係が、「盲目的な力」と自己との関係と同じものと気づいている。無垢な仲間の生き物を破壊させる点で、語り手は「思想がない」としても、創造的想像という意味での「思想」をすることはできる。「思想の無さ」は一種の死であるからである。「蠅」や「虫」のような下等生物も、人間の想像力に匹敵する本能を持っている、とブレイクは「生けるものすべて聖なり」で言っているのである。これはブレイクの「微細因子」(“Minute Particulate”)の主張である。

「微細因子」とは、あらゆるもののこの世における永遠の個性の外的表現である。「神性な人間性」(the Divine-Humanity)である神は、究極的には「唯一の普遍的な形」(「エルサレム」四三・二〇)であり、「微細な

細部を、あらゆる一人一人をその本体において守ってくれる」のである。「全体に通じる形は細部においてその生命力を持っているのだ、そしてあらゆる細部は一つ一つの人間、神なるイエスの神なる一員なのだ」（『エルサレム』九一・三〇～三一）。

「天国」と「地獄」の間に「煉獄」があるように、「無垢」と「経験」の間に『蠅』の世界があると考えるところもできよう。このような世界における『蠅』の語り手は、宇宙の客観的知識は存在すると考える理神論者のような存在である。ブレイクの考えでは、詩的・予言的精神がないと、哲学的精神は束縛されて停滞してしまい、同じことを何度も繰り返す以外に何も為し得ない。物の部分、ブレイクの言葉では比率（"ratio"）しか見えない人間は、神聖な存在には到達できないのである。『蠅』の語り手は、問いを繰り返すことを永遠に続けなければならない存在なのである。これは経験の世界に安住し、真に物を見ようとする我々の運命でもあるのだ。

（英米文学科 教授）